

2013年7月4日・週刊きたかみ「文芸」欄では

詩歌春秋 475 斎藤彰吾

「うねり」抄

とうばいようこ
東梅洋子

11 闇

この闇は
どこまで続く

すっぼりと
この身が

暗い穴をさまよう
出口をさがす

手さぐりで
いつ たどり着く

道しるべは なに

22 町

立ち止まったまま
前を見たまま
足がすくむ

立ったまま／目を閉じたまま

大切な人が帰りません
築きあげた物／長い時間の思い出

帰る家／もどる古里
もどる町が消えました
ありません

37 家の柱

屋根と屋根／よりそい／手をつなぎ
居間に車が／おじゃまして
電信柱が／線が

家の柱につかまって
主にかわり
思い出／流されぬよう
彼等は／ふんばったのか
無惨な姿を／さらけだして

『連結詩 うねり 70篇 大槌町にて』（'13・3・11 コールサック社刊）。掲出の3篇に続けて「59 3月12日未明」「62 鉄橋」を載せたかったがはぶく。被災当時、大槌町の人口は一万六千人弱。全半壊約三七〇〇戸、死者行方不明者が約千三百人。作者東梅洋子の「あとがき」。その日、今住む北上から「無我夢中で百二十kmを故郷へ 大槌へ、何かやらなければ、その思いだけで走ってきました」。目前にはあったはずの町が消え、立ったまま足がすくんでしまったという。かつてない現実感にさらされ「22 町」ができたのだと思う。次の「37 家の柱」は、被災した物へのいたわりが、助け合って暮す人間の営み同然にえがかれている。題名上の数字は通し番号。

と紹介されています。